

発表要旨「拙著『西田幾多郎と瀧澤克己』について」

前田 保（瀧澤克己協会）

- 1, 私は瀧澤克己を研究する立場から 2018 年に『西田幾多郎と瀧澤克己——交流の真実』（七月堂）を上梓しました。今回はこの本を取上げます。
- 2, 拙著は四部構成で、それを順にご紹介します。第一部は全 62 通にも及ぶ瀧澤宛て西田書簡の分析で、二人の間に本当の研究者同士の共感と師弟関係があったことを明らかにしました。ところが、ある時、西田が根本問題において不徹底を認めその徹底を約束するという、立場が逆転したような関係が生じることに気づきました。
- 3, 第二部は秋月龍珉の証言に導かれ、この異変の背景を探りました。秋月は「戦前、西田哲学を理解して批判したのは瀧澤だけで、現実の世界を弁証法的一般者の自己限定として一元的に捉えることは出来ないのではないかと指摘した。西田はこれを受けとめ、宗教論の逆対応の概念で答えた」としています。
これを受けて私は二人の思想交流に四期を区別しました。第一期は瀧澤の論壇デビューとそれに喜んだ西田がみずから交流に及ぶ時期（昭 8～11）です。第二期は瀧澤ドイツ留学帰国後の『西田哲学の根本問題』（昭 11）が画します。瀧澤は西田哲学に疑問を投げかけたのです。これがあの異変の原因でした。西田の約束は宗教論で果たされることとなりますが、それまでほぼ八年を要します。第三期は昭和 19 年 20 年、西田の宗教論構想から完成までの 2 年間です。拙著では「宗教論」を要約してみました。第四期は西田没後です。瀧澤は戦後に宗教論を読み、批判を深めていきますが、他方、終生西田哲学の重要性を強調しました。
- 4, 第三部は西田の宗教論の成立の仕方を探求しました。秋月の見解では宗教論が読めないと判断、彼の指摘を小坂国継の見解に取り入れることを提案しました。小坂と共に宗教論成立に四つの要素を認め、その第一の要素に、秋月にしたがって、小坂が見逃している瀧澤の疑問を組み込むというものです。合わせて、西田最晩年の危機を成立論からあぶりだせかと思えます。
- 5, 第四部は二人の交流から浮かび上がる争点を三つにまとめました。ひとつは「逆対応と不可逆」、ふたつは「仏教とキリスト教」、三つは「哲学の使命と限界」です。逆対応の概念を分析、それが瀧澤の疑問を完全に払拭しきれないこと、そこに瀧澤の戦後の歩みを重ねました。第二点については、西田は瀧澤の立場を仏教で突っぱねたと解釈。しかし、危機はここに痕跡を残したとしました。第三点については、西田にはやはり哲学への無条件の信頼があり、それが瀧澤をして戦後、西田哲学を一つの形而上学と断じさせたと解釈しました。
- 6, 以上、拙著を通して私は、日本初の独創的哲学誕生のすぐ足下で厳しい思想的角逐があり、最晩年の西田の危機の一端をなした、としました。副題を「交流の真実」とした理由です。最後に若干、これからの私の研究課題を述べるつもりです。